

淀川城北ワンドのチュウゴクスジエビ

三橋 雅子・田中 耕司（大阪工業大学 工学部）

中国原産の淡水に生息するチュウゴクスジエビ *Palaemon sinensis* (Sollaud, 1911)は、釣り餌として大量に輸入されてきたことが報告されている。在来種のスジエビ *Palaemon paucidens* De Haan, 1844 とよく似ているため、混同されてきたが、近年、生時に見られる頭胸甲上の模様の違いや大顎の触鬚の有無などの相違からチュウゴクスジエビが識別されるようになり、日本各地の淡水域から報告が相次いでいる。

報告者は大阪府淀川の城北ワンドに生息するイタセンパラ保全のための外来魚駆除および在来魚調査活動に参加し、2020年、2021年に行われた魚類調査の地引網で混獲されたスジエビ類の標本を集め、チュウゴクスジエビの有無の調査を行なった。地引網による在来魚の調査と外来魚類の駆除活動がメインの作業であるため、フィールドでのスジエビ類の模様による識別はせず、採集されたエビは持ち帰り、速やかに冷凍またはエタノールで固定した。これらの標本のうち一部をランダムに選んでミトコンドリアDNAの16S rRNAの配列を読み、データベースのチュウゴクスジエビの配列と比較したところ、半数近くの個体がチュウゴクスジエビで、残りが在来種のスジエビ（陸封性のAタイプ）であることが明らかになった。

この、遺伝子によって同定された標本を含め、形態の確認を行った。在来種のスジエビとチュウゴクスジエビの形態的識別点として、すでに報告されている大顎の触鬚や尾節先端の相違に加えて、在来種のスジエビでは第5腹節後端が尖っているのに対し、チュウゴクスジエビでは同じ場所が丸い（尖っていない）ことが確認された。これは2種を見分ける上で比較的確認が容易で、有用な形質であると思われる。

2021年6月21日の下流の赤川ワンドを含めた城北ワンドの全域（およそ7つのワンド）にわたる調査では、249個体のスジエビ類が採集され、そのうち171個体（抱卵雌13匹を含む）がチュウゴクスジエビと確認された。在来種のスジエビは残りの78個体であった。2021年7月のイタセンパラの生息する2つのワンドでの調査では53個体が採集され、全てが在来種のスジエビであった。2022年4月には同じワンドでチュウゴクスジエビが採集されているため、このワンドにチュウゴクスジエビが全くいないわけではないようである。

現在のところ地引網を引いた地点ごとに採集されたスジエビ類を分けて保存していないため、採集場所の詳細な情報が確認できていないが、泥や有機堆積物が多い底質の場所でチュウゴクスジエビが多く採集されていたようである。また、同じ場所で地引網を引いても、大量のスジエビ類が混獲される場合と、ほとんど確認されない場合があるため、今後、採集される時期や底質等の環境についても確認を行っていきたい。